

野球を始める動機要因に関する研究
～大学生と子どもの比較を通して～
Study on the Factors of motivations to start playing baseball
-Through a comparison of college students and children-

1K09B143

指導教員 主査 原田宗彦 先生

中澤 誠

副査 宮内孝知 先生

【緒言】

近年、テレビ局の有料コンテンツとされたプロ野球の全国中継は視聴率の低下が響いて、放送試合数が激減している。人気、実力ともに球界の盟主とされてきた読売ジャイアンツの地上波放送の視聴率は1999年には20%、2003年には15%を下回った。その後も低下傾向は続いて、2006年以降は2009年に10.6%と2桁を記録したが、2007年、2008年、2010年、2011年と10%を切っている。地上波における巨人戦年間放送試合数も2001年をピークに減少しており2012年には6試合のみの放送となっている。

そして近年、キャッチボールを含めて、野球をやった人の数（行動者数）、行動者率（属性別（男女別や年齢別）の人口のうち、1年間の間に、ある行動（例えば、スポーツやボランティア活動）を行った人の割合のこと。（総務省統計局による定義））ともに減少傾向にあるという現状がある。

そこで本研究では、プロ野球地上波放送数が減少しているために、野球を始める動機要因に対してプロ野球という要素が影響している割合が小さくなり、子どもの野球離れをもたらしているのではないかと考え、プロ野球地上波放送数が減少している近年に野球を始めた子どもと、プロ野球放送数が120試合を超えていた時代に野球を始めた大学生の野球を始めた動機要因を調査、比較することより、動機要因の違いと地上波放送数の減少が与える影響を検討し、因子構造の次元から野球というスポーツのスポーツ参加動機自身を明らかにする。

【調査概要】

調査対象者はプロ野球地上波放送数が130試合を超えていた時代に小学4年生、5年生、6年生で、その時期に野球を始めた大学生と現在、少年野球チームに所属している小学4年生、5年生、6年生とし、15カテゴリー43項目からなる質問紙による配票調査を実施した。配布した資料は質問紙のみとし、質問項目への回答を求めた。調査の結果、大学生は110部配布し、回収106部（回収率96.4%）、有効回答数は104部（有効回答率98.1%）であり、子どもは107部配布し、回収107部（回収率100%）、有効回答数は100部（有効回答率93.5%）であった。

【結論】

探索的因子分析で「既知野球因子」、「挑戦因子」、「誇示・

身体因子」、「親和因子」の4因子16項目が抽出された。t検定の結果、「既知野球因子」においては、大学生の方が有為に高い値を示した($t=2.514, p<0.05$)。つまり、大学生は、今の子どもより、野球を始めるにあたり野球という競技そのものに強く影響されたと考えられる。さらに項目間でのt検定は「プロ野球の試合をテレビで見たから」という項目は大学生の方が有為に高い値を示した($t=5.69, p<0.05$)ため野球という競技の中でも特にプロ野球をテレビで見たことによって野球を始めたと考えられる。よって、大学生と子どもでは、動機要因の中でプロ野球が占める割合が小さくなっていることが解釈できる。しかし、「よく見ているテレビ番組は何ですか」という質問では、大学生が80%、子どもが85%と子どもの方が高い数値を示しており、子どももプロ野球を見ているという結果からプロ野球放送数の減少が動機要因に影響を及ぼしているとは、一概には言い切れない。

また、大学生群と子ども群による探索的因子分析の結果、大学生は「挑戦・親和因子」、「誇示・身体因子」、「既知野球因子」の3因子で全分散の54.1%を説明していることがわかる。子どもは「誇示・身体・親和因子」、「挑戦因子」、「既知野球因子」、「娯楽からの関心因子」の4因子で全分散の60.5%を説明していることがわかった。この結果からどちらの群にも第1因子として抽出されている親和因子は重要な因子であることがわかる。つぎに大学生は「挑戦因子」と「親和因子」が融合し、第1因子となっていることから野球を始めるにあたり、仲間と一緒に挑戦することを求めていると考えられる。子どもは「誇示・身体因子」と「親和因子」が融合し、第1因子となっていることから、大学生と子どもの因子構造の次元からの差異の比較としては、大学生の方は「挑戦因子」が高く、子どもは「誇示・身体因子」が高いということが検証された。また、子ども群からは独自に「娯楽からの関心因子」が抽出された。